Q&A | 受講生の声 | ストリートを舞台にまちを動かす体験から学んだこと

2021年にスタートしたストリートデザインスクール。2年目となる今回は、
公共空間利活用ノウハウをまとめた実践ガイドブックを事前配布するなど、運営面におけるアップデートも実施。
ストリートデザインを実践的に学ぶなかで、どんな苦労や気付きがあったのか受講生に聞いた。

Q1 ――― スクールを受講したきっかけについて聞かせてください
Q2 ――― スクールを通して、ご自身の学びとしての達成度・満足度を教えてください
Q3 ――― 現地プログラムやグループワークを実践したからこそ語れるエピソードを聞かせてください
Q4 ――― スクールでの学びが所属先での取り組みにどのように活かされているか教えてください
Q5 ――― 最後に、受講を検討されている方に向けてメッセージをください

岡田朋子氏 | 建設会社勤務

社会実験1 | OMIYA STREET WARDROBE＠大宮門街前歩道部

A1 ――― まちづくりや公共空間利活用に興味関心はあったのですが、自身に知識や経験がなく、それらを学ぶ機会もありませんでした。スクールという環境で、ほかの受講生と一緒に学べるのであればチャレンジしやすいと感じられたことと、同じ目的をもった仲間にも出会えるのではないか、という期待感が大きかったからです。

A2 ――― 3カ月間集中して取り組めるプログラムが濃密な体験に効果的でした。レクチャーはもちろんのこと、社会実験の実践に向けてUDCOスタッフが併走するサポート体制は充実したものでした。受講生はふたつのグループに分かれて社会実験を企画したのですが、グループメンバーが各自の強みやスキルを活かして、できることを惜しみなくやる雰囲気がありました。頼もしい仲間に恵まれたことはスクール終了後にもつながる大切な糧になりました。

A3 ――― 当日朝に商品が並ぶ前の什器をみたとき、入念な準備をしてきたはずだと思う一方で「果たして思い描いてきた魅力ある風景が生まれるのか」と不安がよぎったことを覚えています。開場時刻が迫り現場調整に追われるなか、ふと周囲を見回したとき、そこには自分の想像をはるかに超えた「色とりどりの古着が並んだ風景」がストリートに現れていました。「今日はすごい一日になる!」と高揚したそのときの気持ちは忘れられません。

A4 ――― 企画から実践までをやり遂げるプロセスにおいて、地域から理解を得ながら協力者を増やしていくことの苦労からは多くのことを学びました。主催者である自分たちが社会実験の目的を芯にもちながらも、まちの当事者たちの思いを汲みつつ、悩みながら企画のアップデートを重ねたことは、関係者間の相互理解を深めるうえで欠かせないものでした。自身の仕事においても「みんなで考えること」に対して、真摯な態度で粘り強く取り組んでいきたいです。

A5 ――― まちづくりや公共空間利活用の経験がないからこそ、新鮮な視点や型にとらわれないアイデアが、企画をよりよい方向へと展開させることも多いのではないでしょうか。ご自身がもっている、まちへの期待や疑問を大事にして、好奇心に従って応募してみることをオススメします!

酒井伸子氏 | メーカー勤務

社会実験2 | SANKITA CROSS POINT＠宮町2丁目道路予定区域

A1 ――― 育児休暇中かつ家族の協力が得られたこともあり、復職に向けて公共空間に対する視野を広げておきたいという思いで応募しました。また、大宮在住で子育てをしている市民としても、大宮ではどのようにして「まちづくり」に取り組んでいるのかを知りたい、という興味もありました。

A2 ――― スクールでは、実際に「まち」に飛び込み「ひと」を巻き込むプロセスが求められるため、書籍や座学だけでは経験できないような小さな気付きを多く得ることができました。漠然とした「まちづくり」という言葉に対して、リアルな体験を通して、受講生がそれぞれの解釈や意味付けをし、自分自身のものに変えていくような学びのプロセスがありました。また、各地域でストリートデザインを実践しているゲスト講師からのレクチャーやクリティークからも、熱量と勢いを感じることができて気持ちが高まりました。

A3 ――― グループで週1回ほど夜な夜なミーティングを重ねました。当初は多種多様なアイデアや意見が交わされて、収束することはできるのかと心配することもありましたが、最終的にはメンバーで同じ目標を見据えることができ、各自が専門性を活かして動き出しました。所属も世代もさまざまなメンバーでしたが、互いに遠慮せずにフィードバックしながら、フラットに取り組める関係性が新鮮でした。

A4 ――― 成果としては、社会実験で「さんきた」というポテンシャルのあるエリアを顕在化することができました。今後も魅力を伝えていくことができれば、個性的な店舗がさらに誘引され、渋谷駅周辺に対する「奥渋」のような、大宮の魅力的なエリアとして認知されるのではないかと考えています。そのため、修了生有志メンバーによって、SNSアカウントをつくり情報発信をするなどの活動を続けています。所属先の外にコミュニティをつくりながら、主体的にまちに関わる活動のきっかけになりました。

A5 ――― まちづくりに興味ある方、大宮に関わりたい方であれば、敷居が高いものだと思わずに応募してほしいです! 私自身も「専門性がなくてもやっていけるだろうか」と応募直前まで心配でした。実際は、基礎的な知識はレクチャーで学びつつ、実践プログラムは個人ではなくグループで進めていくため、困難も分かち合いながら受講することができました。